

(承前) 「不安と恐怖」をテーマにしたラース・フォンの作品はさらに続きます。『エビデミック』(1987)は、「ヨーロッパ三部作」で共同脚本を書いていたニルス・ヴァセルとフォン・トリアーが劇中で脚本家と監督を演じ、新作映画の制作に取り組んでいるのですが、脚本データを操作ミスで全部消し去ってしまい、締切まで五日という絶望的な状況の中で、開き直って以前から構想のあった『エビデミック』という新たな物語を書き始めるというものです。“エビデミック”というのは、コロナ禍で“パンデミック”という言葉が随分と広まったのですが、“パンデミック”の地域限定版といったものです。劇中劇として出てくる『パンデミック』は、未知の伝染病が蔓延する近未来のヨーロッパを舞台に、主人公の若き医師(フォン・トリアーの二役)が、病を食い止めるためにロックダウンされた街を飛び出し、独断で治療に当たろうと奔走するのですが逆に病原菌の媒介源となり病を広めてしまうという皮肉な展開が用意されます。脚本完成を記念し、プロデューサーを招いての宴で脚本家と監督は脚本の凄さを証明するため、催眠術師と一人の女性を呼び、彼女をトランス状態にさせ伝染病の世界の追体験をさせようとしています。しかし、フィクションとして描いていた恐怖が完全に現実を侵食してしまい地獄絵図の中で物語は幕を閉じる結果になります。伝染病という異種の災厄の到来を描きながらも、フォン・トリアーの思惟の中には容認することのできない思想の伝染や制御不能な現実の変容という、より形状学的な恐怖のメタファーとして機能するのです。フォン・トリアーの実験的な試みは本作でも行われ、現実パートを粗い粒子の16mmフィルムで、劇中劇のパートを35mmフィルムで撮り分けるという手法をとっています。ということは、虚構の世界を鮮明であるという倒錯した視覚体験であり、物語の世界が現実を追い越していくという不気味さの増幅にもつながります。そして、催眠術師の出現は、人間が制御できない本能的な恐怖や歴史の亡霊を現実世界に呼び戻す媒介者であり、登場であり、深淵な闇からは逃れることができないというフォン・トリアーの考える現代科学そして理性の限界を示唆したものと言えるのではないのでしょうか。周到な準備と仕掛けで本作を第一級のホラー作品に仕上げた手腕を観客はどう捉えるかということです。おそらく拒否反応を示す観客が少なからずいることが予想されますが、この毒気こそがフォン・トリアーの真骨頂という気がしてなりません。

『ヨーロッパ』(1991)は、「ヨーロッパ三部作」の最後を飾る作品です。第一作目から7年を経過します。1945年秋という設定は、第二次世界大戦終了直後であり、敗戦国ドイツを舞台にドイツ系アメリカ人の若者がドイツに在住する叔父を頼って戦を求めに来て、鉄道が会社の深夜特急の車掌になる話です。そして、鉄道会社の寝台車車掌としての視点を通じ、破壊された街並みと、ナチズムの亡霊が彷徨う人々の心理を描きました。主人公のアメリカ人青年は、「中立」を保とうとしますが、その中立さが結果として「誰と手を組むか」という倫理的判断を回避し、最悪の状況に加担してしまう過程を描きます。これは、戦後ドイツ社会全体が直面していた責任回避の構図を浮き彫りにしています。このあたりが、敗戦国日本との戦後処理の手法なり精神的な残影の違いを見せつけるところでもあります。つまり、物質的な破壊のみならず政治的・精神的混乱が異質であり終わりのない戦争の延長線上にある状況は、冷戦構

造や1989年の世界的変動という具体的な事象で表現できるのであり、不安が世界を覆い無力感と絶望感が世界を支配するという世界をフォン・トリアーはどうしても訴えたかったと見るのできるのです。フォン・トリアーにとっては、希望というものはあくまで欺瞞であるように思えます。そして、そこがフォン・トリアーの悲劇でもあるのです。だから厄介な人物なのです。希望さえ持つことのできない実に気の毒な人物といえるでしょう。フォン・トリアーにとって、希望を語ることは「嘘をつくこと」と同義なのかもしれません。だからこそ、彼は「最も純粋な絶望こそが唯一の真実である」という救いのない結論を繰り返し描かざるを得ないのではないのでしょうか。

「ヨーロッパ三部作」は、フォン・トリアーにとって自己表現のほんのとはば口であり、周到に準備された前提の提示に過ぎないとも考えられるのです。フォン・トリアーがその後のキャリアで展開する「人間性の地獄」を解剖するための「実験場の設営」であったという側面が強いのではないかという考え方がです。フォン・トリアーにとってヨーロッパ三部作は、自らの作家性を世に知らしめるための「冷ややかな挨拶」であり、同時に、これから始まる「人間という名の化け物」との戦いに向けた、逃げ場のないリングを作り上げる作業だったのかもしれません。早速、次作の『奇跡の海』(1996)でさらに大きな問題提起をすることになるのですが。

フォン・トリアーは、アンドレイ・タルコフスキーを崇めていたという側面があるものの(2009年の『アンチクライスト』はタルコフスキーに捧げられた作品です)、タルコフスキーは『エレメント・オブ・クライム』を観て「ひどい出来だ」と酷評したと伝えられています。タルコフスキーの作品に漂う苦難の先にある「精神的な救済」や「自己犠牲による浄化」への希望こそは、本当はフォン・トリアーの目指したい目標ではなかったのではないかと考えます。フォン・トリアーとタルコフスキーを同列に論じることの困難さはあります。確かに、この二人は映像の質感こそ似ていても、その「魂の向き」が真逆であり、同列に扱うにはあまりに断絶があります。しかし、その断絶の境界線を細かく見ることで、フォン・トリアーという作家の「深い業」がより浮き彫りになる気がするのです。観る者に強烈な不快感や絶望を与えながらも、同時に「人間という存在の深淵」を直視させる抗いがたい魔力に引き込まれたせいでしょうか。このコマーシャルイズムから遠く隔てられた世界で創作活動が続けることの困難さを思いながら、新作の発表を待ち望む者もいることは確かでしょう。「機会の土地アメリカ三部作」の最終作『Washington』の制作の無期延期が報じられた現時点で、その望みも消え去ってしまうのか危惧されるところです。